



2 仏陀の思想

▶ pp.57～61

仏陀出家のきっかけ

—四門出遊（しもんしゅつゆう）の伝説

迦毘羅衛国（かびらえこく。カピラヴァスツ）の皇太子であった悉達（しっだ。シッダールタ）太子は、あるとき城外の園に遊ぼうと、東の城門を出た。浄居天（じょうごてん。インドの神の一種）がその太子の前に、疲れ弱った老人の姿で現れた。あれは何者かと従者に尋ねた太子は、老いというものを知り、さらに万人が老いを免れないことを知ると、たちまち車をめぐらし宮殿に帰ってしまった。

しばらくして南門から出かけた太子の前に、今度は衰えあえぐ病人と化した浄居天が現れた。従者に問い、病というものを知り、さらに万人が病を免れないことを知った太子は、病人のために悲しみ、すっかり楽しみの心が失せて宮殿に帰ってしまった。

またしばらくして西門から出かけた太子は、浄居天が現し出した死人とその葬列に行き合った。従者に問うて、死というものと、万人が死を免れないことを知った太子は、すぐに宮殿に帰ってしまった。

後日、北門から出かけた太子が、樹下に端坐（た

んざ）し、世間の人々の老・病・死の苦に思いをめぐらしていると、僧と化した浄居天が現れた。僧と問答を交わし、修行して解脱を得た僧はもはやこの世界に転生しないと知った太子は、初めて喜ぶようすを見せた。

太子を愛する父の浄飯王（じょうばんおう）は、そうした太子のようすを案じ、心を傷めていたが、太子は心中深くに出家の志を固めていったのである。

（『今昔物語集』巻第1第3話による）

慈（いつく）しみ—仏陀のこゝろ

一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穩（あんのん）であれ、安楽であれ。

いかなる生物（いきもの）生類（しょうるい）であっても、怯（おび）えているものでも強剛なものでも、悉（ことごと）く、長いものでも、大きなものでも、中くらいのものでも、短いものでも、微細なものでも、粗大なものでも、

目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ。

何びとも他人を欺（あざむ）いてはならない。たとどこにあって他人を軽んじてはならない。悩まそうとして怒りの想いをいだいて互い

に他人に苦痛を与えることを望んではならない。

あたかも、母が己（おの）が独（ひと）り子（ご）を命を賭けても護（まも）るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対して、無量の（慈しみの）こころを起（おこ）すべし。

また全世界に対して無量の慈しみの意（こころ）を起すべし。……

立ちつつも、歩みつつも、坐しつつも、臥（ふ）しつつも、眠らないでいる限りは、この（慈しみの）心づかいをしっかりとたもて。

この世では、この状態を崇高な境地と呼ぶ。

（中村元訳『ブッダのこゝろ—スッタニパータ』

岩波書店 1984年）



3 仏教とその後の展開

▶ pp.61～64

空の論証—火と薪（たきぎ）との考察

1 もしも、「薪がすなわち火である」というのであれば、行為主体と行為とは一体であるということになるであろう。またもしも「火が薪とは異なる」というのであれば、薪を離れても火が有るということになるであろう。

2 また「火が薪とは異なったものである」とすると、火は「永久に燃えるものである」という